

ロシア～ドイツ 5カ国を巡って



国際航業株式会社
東日本事業本部/第四技術
アセットマネジメントグループ

石黒 雄紀
ISHIGURO Yuuki

防災技術者の責務として発表

入社以来、防災設計を専門としてきた私は、平成23年度は息つく暇の無いめまぐるしい毎日となりました。この年は、東日本大震災に始まり、台風や豪雨が全国各地で甚大な被害をもたらしたため、どの物件も緊急対処案件となり、年度末明けの安息は全くありませんでした。

そんな中、知らぬ間にエントリーが決まっていた「平成23年度 建設コンサルタント業務・研究発表会」は、提出期限ギリギリまで全く筆を進めることができず、提出辞退を覚悟しなければならぬ状況まで陥りましたが、災害業務に携わる技術者の一人として、『今発表することが自分の使命である』と言い聞かせ、寝ずの作業で書き上げました。その介あってか、幸運にも優秀賞と、副賞として今回の視察へ参加させていただき、大変貴重な経験をすることができました。

本来、視察参加の体験寄稿文は、各都市のインフラ事情や、訪問先での経験などを述べるべきではありますが、今回業務・研究発表会からの視察参加者が三名いるということも踏まえ、インフラに限らず私が各都市で感じたことを率直に記載させていただこうと思います。特に、短期間で5カ国を横断する機会があったからこそ得られたこととして、(若手)防災設計技術者が感じた思いを述べてみたいと思います。

鉄道、船、バス、11日間2,000kmの弾丸ツアー

今回の視察は、ロシア西端のサンクトペテルブルクから始まり、フィンランド、スウェーデン、デンマーク、ドイツと5カ国(約2,000km)を11日間で巡るといって、大移動視察でした。同じ都市で連泊するのは2度だけで、その他は鉄道、船、バスを多用し、総勢22名が連日スーツ



図1 視察ルート

ケースを抱えたキャラバン隊を形成しました。

今回の視察の特徴の一つが、都市間移動の交通手段に国際高速鉄道を用いたということです。サンクトペテルブルク(ロシア)～ヘルシンキ(フィンランド)、ストックホルム・ヨーテボリ(スウェーデン)～コペンハーゲン(デンマーク)～ハンブルク(ドイツ)、と4種類の高速度鉄道に乗車することができました。鉄道が都市や国境を越えるに連れ、徐々に街並みや景観が変化する様子を体験できました。

新世代により革新するロシア

モスクワでのトランジットの後、ロシア第二の都市サンクトペテルブルクを訪れました。同市は、ロシアの中でも最も西側に位置しており、文化や風景は欧州の都市と遜色無い華やかな街並みであったため、ソ連時代の印象を想像していた私は肩透かしを食らいました。二日間の滞在中は、欧州車や日本車などの高級車が街中を行きかい、通勤時に大渋滞する姿は、旧超大国であり、エネルギー輸出により経済発展著しい現ロシアが映し出しているものと痛感しました。それらは統計的にも数値で表されており、2011年1～6月の新車販売台数は123万台余、前年同期比で56%増(前年同期比の増加率は主要国で圧倒的トップ)という成長ぶりだそうです。

また、大通りを歩く人は皆長身で服装も華やかで、ロシアを代表するテニスプレイヤー シャラポワを彷彿とする、若く美しく煌びやかな人々が溢れており、ソ連時代を知らない若い世代が、新しいロシアを作り始めていることを実感しました。

経済・教育・地形的に安定したフィンランド

フィンランドは人口約530万人、北海道ほどの面積を持つ国ですが、NOKIAをはじめとしたハイテク産業を中心とした電子機器工業先進国であり、国際経済競争力で上位に位置する国です。また、教育や女性の雇用機会に対する熱心な取り組みで知られています。これらの情報からは、人々が皆せわしなく動き回る姿を想像していたのですが、予想に反し、街でみかける人々は非常にゆったりと穏やかに過ごす姿が見られました。平日の昼間にも係らず、公園は散歩や談笑



写真1 約1,000の駅が全て異なるテーマを持ち、全長110kmにわたる「世界一長いアートギャラリー」



写真2 頭を下げて桁下ギリギリを通る、通称「チーズ・スライサー」



写真3 移動手段はトラムが主体とし、街の景観を維持

する人々が溢れており、スーツを着たビジネスマンの姿はほとんど目にする事なく、穏やかなこの風景のどこからハイテク産業が生み出されるのか不思議でなりませんでした。

また、フィンランドは国土が亀裂の無い岩盤の上に成立っており、地震や暴風雨などの災害が全くと言っていいほどない、安定した地盤の上に成立しているようですが、災害が無い安定した地盤が、知的で穏やかで、marimekkoやittalaなど独創的なデザインを作り上げる国民性を形成するのでしょうか。

自立した女性の際立つスウェーデン

スウェーデンは、「琵琶湖よりも波が無く静かなのでは」と感じるほど穏やかなバルト海を、連絡船で抜けて入国しました。スウェーデンは、ノーベルがダイナマイトを発明したことで知られるように、街中の至るところに岩盤が露出しており、それらと共存して街が成立つ姿が印象的でした。道路や宅地面は岩盤を削って切り開かれ、地下鉄は素彫りにモルタル吹付だけで安定してしまう、防災設計技術者要らずの良質岩盤地帯でした。

その他、スウェーデンでは女性の労働参加率が7割以上と高く、経済的にも自立した社会体制を持ちます。その影響か離婚をする事例も多く、ガイドさんの話では、女性の意見がはっきりしており、「嫌になったら別れる。子どもがいても、自分の気持ちに従う。」という考えが多いそうです。

そんな自立した女性の中で際立っていたのが、PADDAN運河のボートツアーガイドを務める地元女性(推定年齢25歳)で、英語とドイツ語を巧みに織り交ぜ、素晴らしく滑らかで美しいプレゼンテーションは、コンサルタントとして頭の下がる思いで拝聴していました。

北欧から欧州ドイツへ

欧州・ドイツに入ると、歴然と変化したものがありました。一つは、風力発電の風車の数です。これまでの国でも風車は見られましたが、ドイツに入った途端にその数が激増しました。風車の規格や大きさ、製造元も様々で、移動中次から次へと風車が確認できました。これは、荒れることの少ない安定した偏西風によるもので、日本で風力発電が普及しづらい大きな課題を突きつけられた思いになりました。

もう一つの変化は、ロシアから北欧、ドイツ、欧州に近づくにつれ、自転車を見かける回数が増えていきました。これは、都市の大きさも要因としてありますが、公共交通への自転車乗り入れや、インフラの整備状況は西へ進むとともに充実しているのは明らかでした。

風車や自転車など、日本の掲げる課題が、ドイツでは成功例として確認できました。

ドイツにみる復興の街並み

今回の視察では、参加者が事前に担当パートを設定し、訪問都市の事前調査を行いました。訪問先の港湾・インフラに関連することを中心に、文化、歴史など幅広く調べ、事前報告書は300ページを超える充実した内容でした。加えて、中村先生から訪問先にまつわる様々なコメントをいただき、それを実際に見て・体験できたことは、非常に貴重な経験になりました。

先生からいただいたお話の中で、最も印象深い内容が、ブレーメン(ドイツ)での、戦後復興の歩みについての話でした。日本と同じく、ドイツも戦争により空爆や市街地戦で多大な被害を受けたが、復興の歩み方は異なっており、経済発展を優先させて復興した日本に対し、ドイツは歴史ある景観修復を優先させて当初の街並みを現在に受け継いでいる、というものでした。

この言葉は、復旧・復興計画を提言する防災設計技術者・コンサルタントとして私の胸に大きく響きました。数世代先の未来を見据え、人々が安全で安心な生活を送るための土木技術を、欧州の古く・新しい街並みに感じました。

5カ国を巡って

移動続きで休む間のなかった視察は、振り返ると充実し、非常に内容の濃い11日間でした。海外と日々の業務は全く無縁のものと思っていましたが、海外都市に見る日本との違いや変化から、今後の課題や目標を多々見出すことができました。この経験をもとに、幅広い視野による柔軟な考えを持った防災設計技術者となるべく、より一層努力して参りたいと思います。

これら貴重な視察に参加させていただき、中村先生、みなと総合研究財団の皆様、インフラストラクチャー研究会の皆様がこの場をお借りしてお礼申し上げます。